平成30年度
鹿児島大学
FD報告書

鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

平成30年度　鹿児島大学FD報告書

CONTENTS

Ⅰ. 平成30年度FD報告書作成にあたって

■ FD委員会委員長（教育担当理事・副学長） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針 3

Ⅲ. 平成30年度FD活動一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅳ. 鹿児島大学のFD活動

第1部 全学的取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

■ 新任教員FD研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

■ FD・SD合同フォーラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

■ 学生・教職員ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

■ 鹿大版FDガイド第16号、第17号 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

■ 大学IRコンソーシアム・アンケート ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

■ 鹿児島大学ベストティーチャー賞 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

第2部 各学部・研究科のFD活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

■ 共通教育センター

■ 法文学部、人文社会科学研究科

■ 教育学部、教育学研究科

■ 理学部

■ 医学部

■ 歯学部

■ 工学部

■ 農学部、農学研究科

■ 水産学部、水産学研究科

■ 共同獣医学部

■ 理工学研究科

■ 医歯学総合研究科

■ 保健学研究科

■ 臨床心理学研究科

■ 連合農学研究科

I 平成30年度FD（ファカルティ・ディベロップメント）報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事・副学長）
武隈　晃

鹿児島大学のホームページにある「鹿児島大学のFD活動」には平成22年度以降のFD活動の詳細が報告されています（https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html#000825）。できますならばご高覧頂くことをお勧めします。本年4月にFD委員長を拝命し、改めてこの間の報告書を通読しましたが、本学におけるFDの取組の成果と課題を時系列に知ることができたように思います。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成するための教員の教授法・指導法の開発、授業力向上の取組み、学習効果をあげるための学生支援などです。昨今ではさらに、各学部のカリキュラム・プログラムの再構築への提言や学生の質と量を伴った学習時間の増加に貢献することが求められています。

大学教育の使命には諸相ありますが、これらのうち高等教育機関としての教育の「PDCA過程の展開」という側面に着目すれば、FD活動は、その基底を成すものと位置づけることができます。平成26年に本学教育研究評議会が決定した「鹿児島大学のファカルティ・ディベロップメントに関する指針」において、大学の責務として「全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備および各教員へのFDへの取組に対して支援を行う。」部局等の責務として「カリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価して、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。」教員の責務として「授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価およびカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。」を掲げています。

こうしたガイドラインに従い、平成30年度は、「FD研修会」、「学生・教職員ワークショップ」、「FDガイド」の3つのワーキンググループが企画・運営し、「FD・SD合同フォーラム」の運営体制も整え、次の事業を継続的に実施しました。

・新任教員FD研修会「単位の実質化と授業時間外学習を踏まえた教育活動の設計」
・FD・SD合同フォーラム「高等教育機関の新たな役割と教職協働のあり方」
・学生・教職員ワークショップ「学生の主体的な学びを加速させる」
・FDガイド第16号「manabaの活用法」、第17号「知ってて、やってて、伝えてますか？～いまどきの教職員に必要な“リテラシー”としてのセキュリティ対応～」
・平成26～29年度に引き続き、大学IRコンソーシアムの学生調査（１年生調査、上級生調査）の実施

平成30年度も「全専任教員の75％以上がＦＤ活動に参加する」という目標数値を達成しました。引き続き、学部等の教職員の皆さん、総合教育機構の教職員の皆さん、そして学生の皆さんのご協力と協働により、全学をあげてＦＤ活動に取り組む所存です。諸賢のご理解と本報告書へのご批正を賜りたく存じています。

本年３月に任期満了で退任された前委員長の清原貞夫先生（前理事）は次のようなお言葉を残されています。この思いを引き継ぎます。

FD活動は教職員個々人の向上意識と自発的な取り組みが不可欠であり、教育を改善するには多大な時間と労力が必要です。授業力アップには各教員の最も大切にする価値に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは各人の研究領域での活動であると思います。したがってFDでは研究活動が教育に密接に関わることを自覚し、教授法の向上とキャリア形成を同時に目指し、全教職員が一歩一歩粘り強く、研究・教育活動を継続推進してもらいたいと念じています。

II 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針

平成26年7月17日
教育研究評議会決定

鹿児島大学(以下「本学」という。)は、鹿児島大学学則(平成16年規則第86号)第２条において、鹿児島大学憲章の下に、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、もって学術文化の向上に寄与するとともに自主自律と進取の精神を持った有為な人材を育成することを目的とすると定めている。本学は、この教育研究上の目的に根ざした人間を育成することができるように、質の高い教育を実施する責務を負っている。そのためには、大学として、教育の内容や方法の開発・改善を組織的かつ継続的に行い、より実質的なものへとしていく必要がある。

(目的)

第１　この指針は、本学におけるファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)を推進していくために必要な事項を定め、教育の内容や方法の開発・改善及び教育研究に関する研修についての責務を明記することで、教育の質の向上及び学生支援の円滑な遂行を図ることを目的とする。

(定義)

第２　の指針において、FDとは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す。

２　この指針において、「部局等」とは、学部、研究科及びセンター等、FD活動において組織的な取組を実施する主体を指す。

３　この指針において、「教員」とは、本学の常勤及び非常勤の教員を指す。

(大学の責務)

第３　本学は、その教育理念や教育目標を実現するために、全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備及び各教員のFDへの取組に対して支援を行う。

(部局等の責務)

第４　部局等は、学部・学科等のカリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価し、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。

(教員の責務)

第５　本学の教員は、自らが担当している授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価及びカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。

平成30年度　FD活動一覧

9月	新任教員FD研修会(9/26)
10月	FD･SD合同フォーラム(大学地域コンソーシアム鹿児島FD･SD活動事業部会と共催)(10/13)
11月	大学IRコンソーシアムアンケート実施(11/1～12/14)
12月	学生･教職員ワークショップ(12/7)
1月	鹿大FD報告書(平成29年度)の作成
	鹿児島大学FDガイド第16号の発行
3月	鹿児島大学FDガイド第17号の発行
	鹿児島大学ベストティーチャー賞表彰

平成30年度　FD委員会委員名簿

所　属	氏　名	所属ワーキンググループ
理事(教育担当)	清原 貞夫	
高等教育研究開発センター長	小山 佳一	
高等教育研究開発センター専任教員	出口　英樹	
高等教育研究開発センター専任教員	中里　陽子	
共通教育センター専任教員	渡邊 弘	FDガイド
法文学部	米田 憲市	FDガイド
教育学部	日隈　正守	学生･教職員ワークショップ
理学部･理工学研究科	伊東 祐二	学生･教職員ワークショップ
医学部	木佐貫 彰	FD研修会･講習会
歯学部	後藤 哲哉	FD研修会･講習会
工学部	木下 英二	FDガイド
農学部	畑　邦彦	FD研修会･講習会
水産学部	鳥居 享司	FD研修会･講習会
共同獣医学部	帆保　誠二	FDガイド
医歯学総合研究科	田川 まさみ	学生･教職員ワークショップ
臨床心理学研究科	大石　英史	学生･教職員ワークショップ

Ⅲ 鹿児島大学のFD活動

第1部

全学的取組

新任教員FD研修会

1. 概要

テーマ　単位の実質化と授業時間外学習を踏まえた教育活動の設計
日　時　平成30年9月26日(水)13:30～16:30
場　所　郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール
参加者　33名

2. 研修会の趣旨

数年来、新任教員FD研修会ではアクティブ･ラーニングをテーマとして取り上げてきた。今年度も基本的にその流れの中にある。ただし、授業の具体的な運営方法としての技術だけでなく、そもそもアクティブ･ラーニングが求められる背景にある考え方に遡り、単位の実質化という観点から教育活動の設計を考えることとした。

3. ミニ･レクチャー

講　師　出口 英樹(高等教育研究開発センター 准教授)

冒頭において、本学の現状に関する報告と、アクティブ･ラーニングや単位制度の定義･趣旨に関する説明があった。本学では第3期中期目標の基本目標として以下の項目を挙げている 。

地域特性を活かした教育及び国際化に対応した教育を推進するとともに、高大接続の見直し、アクティブ･ラーニングの強化、教育の内部質保証システムの整備、学生支援の拡充等の教育改革に取り組みます。

アクティブ･ラーニングという文言があるほか、「教育の内部質保証システムの整備」との表現がみられる。教育の内部質保証システムとは、教育の質を外在的なる評価指標や外部評価システムによって担保しようとするのではなく、自ら評価指標を設定し、評価検証とその結果を踏まえた改善を継続的に図る大学内部のシステムを意味する。教育の質を保証するとは、学生の学位取得に至る一連の過程であるカリキュラムの質保証が必要であり、これをさらにかみ砕けば、カリキュラムをなす構成要素としての授業の質、そして、授業の履修を通じて与えられる単位の質を保証することが必要となる。ここに単位の質保証の意義が認められる。

単位制度上、講義や演習の場合、授業時間の倍の授業時間外学習時間の学習が求められる。しかし、その規定そのものが充分理解されていないのが実情である。そして、本学においては学生の授業時間外学習時間は極めて短く、1週間当たりの授業時間外学習時間が2時間以内という学生が1年生で34.2%、3年生では39.1%にも及んでおり 、単位の質が保証されているとはいいがたいのが実情である。こうした傾向は本学だけの問題ではなく、我が国の高等教育機関が共通して抱える問題であるものの、本学の大きな課題としてその解決に取り組む必要があるといえる。

鹿児島大学中期目標･中期計画
https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/mokuhyouH30.3.pdf(2019年2月15日最終閲覧)

4. 話題提供

講　師　渡邊 弘 氏（共通教育センター 准教授）
講　師　大野 裕史 氏（共通教育センター 助教）

上記のような状況を改善する手立てとして期待されているのがアクティブ・ラーニングである。アクティブ・ラーニングと聴くと“アクティブ”という言葉から可視的な活動を含む学習形態と誤解される場合がある。しかし、アクティブ・ラーニングにおいて肝要なのは学生が頭の中をアクティブにし、能動的に学べるようにすることである。つまり、アクティブ・ラーナーの育成こそがアクティブ・ラーニングの目的ともいえる。この点を理解したうえで教育活動を設計する必要があり、その事例として2名の教員から話題提供を受けた。共通するのは、「予習を前提とした授業設計」という姿勢である。

渡邊氏の授業には、大きな特徴が3点ある。新聞を積極的に活用している点、予習を前提とした授業設計を行っている点や教員によるレクチャーの時間を極力少なくし、学生自身に考えさせる姿勢を明確に打ち出している点である。特に、予習を前提とした授業設計を行っているという点は、単位の質保証という観点から注目に値する。予習を課すということは、授業時間外の学習時間が一定程度担保されることになる。また、予習内容がそのまま授業に生かされるのであれば、学生が能動的に学ぶ姿勢を身に付けるうえでも効果的であると考えられる。渡邊氏の実践が全ての授業で同じように適用できるわけではないものの、予習を前提とすることによる単位の質保証やアクティブ・ラーニングの推進という意味において非常に参考になるものである。

大野氏からは、反転学習に関する情報提供があった。反転学習とは、先述の渡邊氏による実践にも見られるように、授業時間外の予習として学習する知識内容についてインターネット等を通じて学び、そこで生じた疑問や解決を図るべき課題などについて授業時間にディスカッションや質疑応答をすることでさらに学びを深めることを意図した学習形態である。大野氏はそのための教材として動画を作成しており、これを視聴することで学習が進められる環境を整備している。動画の作成には一定の技術が必要であり、多忙化の進む昨今の大学教員にとってその負荷は少なくない。しかし、このような方法を採ることで学生の能動的な学習が促される効果が期待される。また、動画が存在することで、学習内容の定着が不安な学生は復習も可能になる。本学では共同獣医学部において授業は全て録画し、学生の復習等の活用を促す取り組みが既にある。様々な方法を通じて学生の能動的学習を促すことが求められており、大野氏の取り組みはこうした点で貴重な知見を得られるものである。

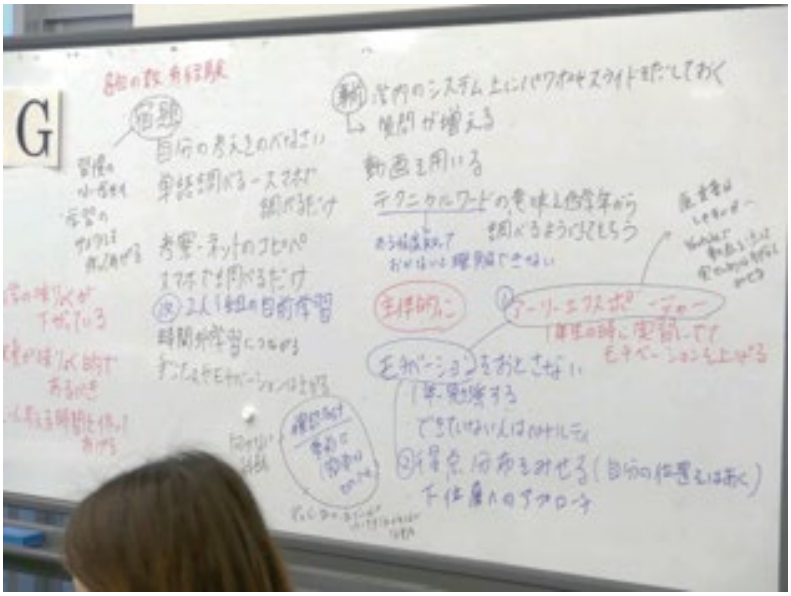
大学IRコンソーシアム・アンケート2017報告書（学内限定）
https://www.kagoshima-u.ac.jp/internal/post-1329.html（2019年2月15日最終閲覧）

5. グループ・ディスカッション・発表

グループ・ディスカッションは、所属が偏らないよう配慮されたグループに分かれ、テーマに基づき教育活動を設計する上での要点や留意点について議論が行われた。医学部・歯学部・共同獣医学部といった国家試験にかかわる学部での教育においては、能動的に学ばせる姿勢の重要性は理解できる一方、教えなければならない学習事項が厳然として存在することからそのバランスが困難であるとの指摘があった。一方、そうした文脈を持たない学部については、目指す進路や学習に対する目的・目標が多様であることから、能動的に学ばせるにしてもそのための具体的な手立てを考えることは必ずしも容易ではないとの声があった。

単位の質保証は高等教育機関として欠くことのできない取り組みであると同時に、授業時間外学習時間の確保という極めて解決が困難な課題を抱えてもいる。アクティブ・ラーニングはその解決に寄与する可能性を有するものの、具体的な方法については各授業のカリキュラム上の位置づけや目標、教員や学生の資質や状況に応じて行わなければならない。今後も引き続き取り組むべき課題であることから、具体的なアクティブ・ラーニングの方法や様々な取り組みの事例について、新任教員だけでなく、意欲的な教員に対する積極的な情報発信を行い、組織として改善を図る仕組みを整備することが望まれる。

（文責：高等教育研究開発センター　伊藤奈賀子）



平成30年度 FD・SD合同フォーラム

6. 概要

テーマ　高等教育機関の新たな役割と教職協働のあり方
日　時　平成30年10月13日(土)13:00～16:30
場　所　郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール
参加者　65名

7. 目的

年度は、高等教育機関が各々のミッションに基づいて行うあらゆる活動においてその成果を高めるための重要なキーワードである「教職協働」をテーマとし、そのあり方・実践の仕方について考えることを目的として企画した。教職協働とは、高等教育機関における教員と職員との協働を意味して用いられる用語である。
教職協働及び大学職員をめぐっては、2000年代後半から中央教育審議会答申で言及がなされていたことを受け、2017年には大学設置基準に教職協働の必要性が明記されるに至った。同時に、SDの必要性についても第42条の3として規程が設けられた。

近年、教職協働の重要性が増している背景には、どちらか一方だけでは充分な成果を挙げることが困難となっている高等教育機関の実情がある。これまで、特に国立大学においては、大学運営の中心は教員であり、職員はその活動を事務的に補佐すると考えられてきた。しかし、教員は自身の専門分野に関しては専門家であっても大学運営の専門家ではなく、急速な変化の最中にある大学運営を教員のみで進めるのは極めて困難な状況にある。また、職員の側にも主体的に大学のあり方を考え、大学改革に向けた能動的な取り組みが求められている。

このような状況を踏まえ、教職協働に関する組織的かつ先進的な事例と、教職協働を積極的に行うことを通じて自身のキャリア形成を進めてきた若手教員の事例について話題提供を受けた上で、参加者同士のグループ・ディスカッションを行うという2部構成で、今回のフォーラムを実施することとした。

8. 話題提供

講　師　吉田 一惠 氏（愛媛大学 SD統括コーディネーター）
講　師　家島 明彦 氏（大阪大学 全学教育推進機構 講師）

吉田氏からは、在籍する愛媛大学における取り組みが紹介された。愛媛大学は、教職員能力開発拠点の認定を受けるなど、以前から教職協働や職員の能力開発に時報に積極的に取り組む大学として知られている。吉田氏はそのような愛媛大学の取り組みにおいて中心的な役割を果たしており、現在はSD統括コーディネーターとして、愛媛大学だけでなく、SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）加盟校の他、多数の大学職員の能力開発に関与している。

愛媛大学では、マクロ、ミドル、ミクロという3つのレベルの教職協働が行われている。マクロ・レベルでは、国立大学法人化を契機として組織改革が行われた。中でも特徴的な変化は、理事の位置づけを教員組織と職員組織双方のトップとした点である。ミドル・レベルにおいては、現場からの要請や必要性に応じ、教職協働を支援する組織的な取り組みが進められた。例えば、独自の制度として、教育活動を重点的に行う「教育コーディネーター」制度を設け、大学全体が有機的につながりながら教育改革が進められる態勢を整えた。教育コーディネーターは教員のみであるものの、研修会には職員も参画することとし、教育改革に対する理解の深化が図られている。また、愛媛大学では平成28年度に社会共創学部が新設されたが、設置業務には職員も多大な関与をし、社会人大学院生としての立場も有するある職員は一連の業務を論文とまとめ、公表しているとのことである。そして、ミクロ・レベルでは、教職員研修の運営等の草の根的な取り組みがある。こうした取り組みは本学を含め多くの大学でもいくらか行われていると考えられるものの、愛媛大学においては研修の講師を職員も務めている点に特徴があるといえる。

吉田氏からは、今後大学職員には、これまで行ってきた役割を超え、長期的視野に立って大学をより良い方向へと企画・立案していく能力や実施に向けて運営・調整していく能力が強く求められるとの指摘があった。異動が必ずある働き方の中でも、大学職員としての専門性－それは、大学人ジェネラリストと大学人スペシャリスト双方の能力だけでなく、個々の組織文化や特性に対応しつつ異なる大学でも通用する業務遂行能力をも指す－を積極的に進化させる姿勢が重要であるとの提言があった。

家島氏からは、自身の大学教員としてのキャリアを踏まえ、特に若手教員にとって大学職員とのかかわり、教職協働が果たす役割について講演が行われた。家島氏は現任校においても前任校においても全学的なFDの推進等を業務とする立場であり、様々な企画を立案・実施するにあたっては職員の協力が不可欠であると指摘された。この点に関しては、本学において同様の立場にある筆者も同感である。特に、企画の立案を進める過程、学内手続きについては、着任間もない若手教員には不明な点ばかりであり、経験のある職員の支援なくしては業務の遂行そのものが非常に困難である。大学教員はそれぞれの専門分野においては専門家であるものの、それ以外の部分においては一大学人、一社会人に過ぎない。この点を教員自身も理解しつつ、業務に臨む姿勢が重要であるといえる。

教職協働をより良い形で行う合言葉として挙げられたのは「学生のために！」である。失敗に至る要因として考えられるのは、コミュニケーション不足による互いへの疑心暗鬼や過大評価・過小評価である。また、責任の所在が曖昧であることも失敗の要因として考えられる。教員と職員とは「学生のために！」との思いを共有していても、立場の違いによって異なる状況認識に至ることは避けられない。だからこそコミュニケーションを積極的に測り、より良い大学へといかに導いていくかをともに考えることが必要となる。互いに歩み寄ることによって成功へと近づくことが可能であり、それこそが望ましい形での教職協働であるとの知見が示された。

9. グループ･ディスカッション

グループ･ディスカッションについては、吉田氏･家島氏もそれぞれグループに加わり、「教職協働」を円滑かつ実効的に推進していくために必要なことは」とのテーマで行われた。ディスカッションのゴールとして「『教職協働』を実現するために（あるいはその阻害要因を克服するために）必要な人間関係･意識･組織･仕組みとは」との問いに対する回答が設定された。

本企画の参加者には教員も職員もいるほか、大学地域コンソーシアム鹿児島と鹿児島大学FD委員会との共催企画であることから、様々な大学の教職員の参加があった。このため、それぞれ特有の文脈がある一方、高等教育機関としての共通性も一定程度認められる。そうした互いの状況に対する理解を深めつつ、より良い教職協働の在り方について積極的な意見交換がなされた。

グループ･ディスカッションの成果は本企画の最後に発表されたものの、望ましいのはここで検討された内容を参加者が各大学に持ち帰り、各勤務校の状況に応じた教職協働の在り方を改めて検討し、実行に移すことである。本企画で得られた成果が参加者の勤務校のさらなる発展に寄与することを祈りたい。

（文責：高等教育研究開発センター　伊藤奈賀子）

平成30年度　FD･SD合同フォーラム　事後アンケート結果

1. 参加者ご自身について（当日参加者：65名、回答者：44名）

①所属

●鹿児島大学（15名）　●大学地域コンソーシアム加盟校（24名）
●その他(5名)

②立場

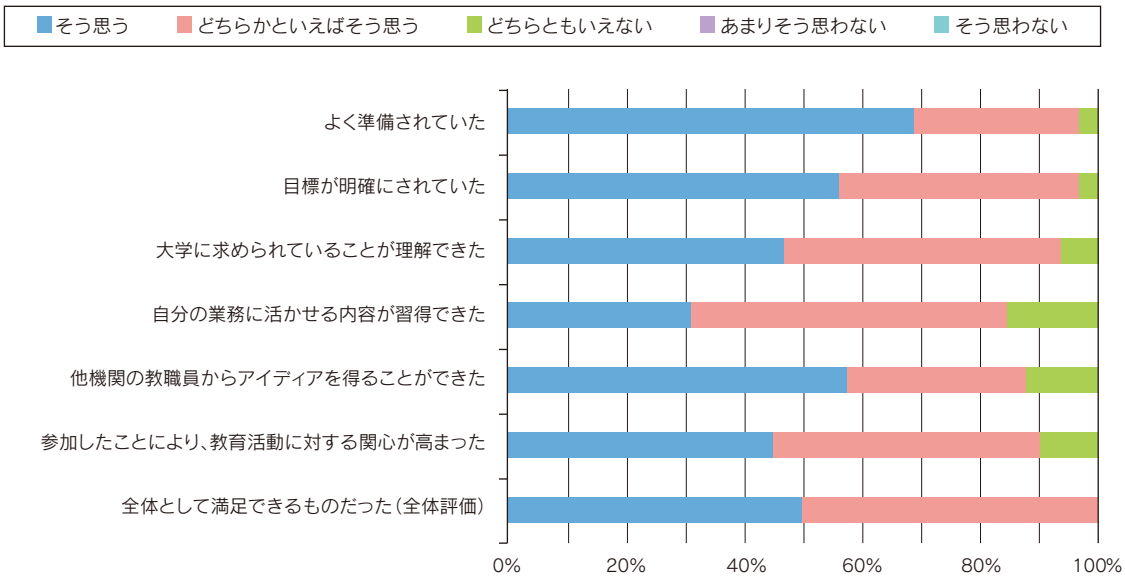
●教員　鹿児島大学10名、コンソーシアム加盟校　6名、　その他　1名
●職員　鹿児島大学　7名、コンソーシアム加盟校 17名、　その他　1名
●不明　2名

2. 研修内容について

参加して感じたことをお答えください。

⑤そう思う　④どちらかといえばそう思う　③どちらともいえない　②あまりそう思わない　①そう思わない

設　問	⑤	④	③	②	①
よく準備されていた	26	17	1	0	0
目標が明確にされていた	29	12	2	1	0
大学に求められていることが理解できた	22	16	5	0	1
自分の業務に活かせる内容が習得できた	18	19	6	1	0
他機関の教職員からアイディアを得ることができた	25	13	5	1	0
参加したことにより、教育活動に対する関心が高まった	24	13	6	1	0
全体として満足できるものだった（全体評価）	30	11	3	0	0



3. 本フォーラムの実施曜日について、当てはまるものをお選びください。

- 平日の方が参加しやすい（5名）
- 土曜の方が参加しやすい（23名）
- どちらでもよい（16名）

4. 今回のフォーラムについてのご意見・ご感想等を、ご自由にお書きください。（抜粋）

教員

- 愛媛大学のような取り組みが必要であると感じました。
- とてもグループディスカッションがしやすかったです。ありがとうございました。
- 教職員、事務職員の立場を改めて考えさせられた。「学生のため」を考えたらお互い協力できるはずです。
- 全体のテーマは（教職協働）良く分かったが、具体的レベルに落とし込んだ時に、発生する問題は氷解しなかった。教職協働という大義名分には、だれもが賛成だろうが、各校、各現場でどのように実行するかが、一番困難だと思う。

職員

- ワークショップ方式だと、参加したという実感があってよい。

その他

- 教職協働の重要性を認識でき、今後どのように実践していくかを考えるいい時間（講義）だったと思います。

平成30年度学生・教職員ワークショップ

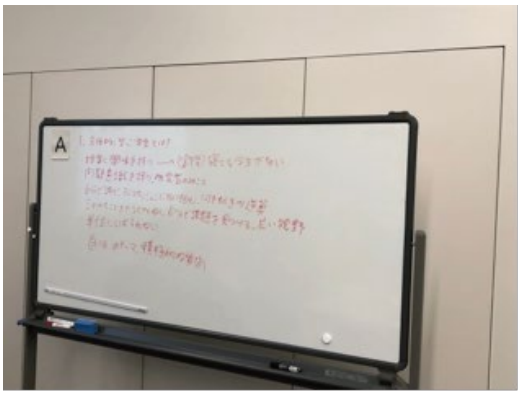
テーマ　「学生の主体的な学びを加速させる」
日　時　平成30年12月7日(金)16:10～19:20
場　所　郡元キャンパス　学習交流プラザ２階　学習交流ホール
参加者　42名(学生18名、教員13名、職員10名、一般１名)
対象者　教育に関心のある学生、教育に携わっている教職員
学生…各学部、研究科より推薦を受けた学生、及び自主参加希望者
教員…各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、ＦＤ委員
職員…各学部学生系職員、学生部職員

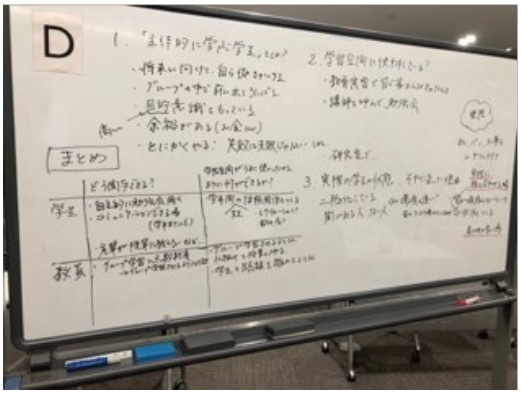
今年度の学生・教職員ワークショップは、平成３０年１２月７日に郡元キャンパス学習交流プラザ２階学習交流ホールで開催された。今回は、「学生の主体的な学びを加速させる」とのテーマで、学生、教員、職員、一般合わせて４４名の参加があった。
本ワークショップでは、昨年度の「学生の主体的な学びを促すには」というテーマをさらに発展させ、「学生の主体的な学びを加速させる」というテーマが掲げられた。学生が主体的に学び、授業時間内外で充実した学びを経験することは大学教育の重要な課題のひとつであり、学生がアクティブ・ラーナーとなることは大学教育の最終目標でもある。しかし、現状では、学生の授業時間外学習時間は依然として短い状況が続いている。
今回のワークショップは、このような現状を踏まえ、学生の主体的な学びを支援するための様々なインフラや仕組みをいかに実効性のあるものとしていくかとの問題意識のもとで企画された。

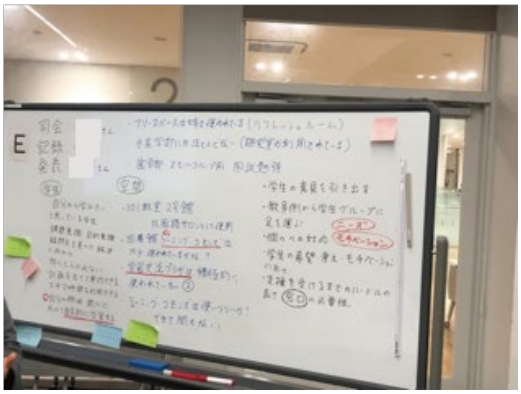
まず、高等教育研究開発センター長である小山佳一氏の開会の挨拶の後、同センター出口英樹氏による趣旨説明が行われた。引き続き、レクチャー＆ワークセッションとして、国際教養大学図書館長の加藤信哉氏と九州工業大学教養教育院准教授の宮浦崇氏に約４０分ずつのご講演をいただいた。演題は、それぞれ「国際教養大学中嶋記念図書館の学習支援への取り組み」、及び「学生の主体的な学びを加速させるために～九州工業大学の事例についての情報提供～」であった。いずれのお話も、わが国を代表する先進的な取り組みとして興味深いものであり、今後、本学でも取り入れることのできるヒントが得られる貴重な時間となった。

後半の時間は、高等教育研究開発センター伊藤奈賀子氏によるファシリテーションのもと、予め振り分けられた５つのテーブルに同席した７名前後の学生、教員、職員混合グループが、今回の「学生の主体的な学びを加速させるには」というテーマについて、ディスカッションを行った。具体的には、学生の主体的な学びに資する様々なインフラや仕組みをどのように活用するか、現在整備が進んでいる教室以外の学習空間を使うように仕向けるために何ができるか(こんな使い方をしたらいい、こんな仕掛けがあったら活用される、こんな声かけをされたら行く、こんな空間だったら使う)という観点から、ディスカッションが深められていった。
アイスブレイクの後、各グループ内で進行係、記録係、発表係が選出された。最初は、「主体的に学ぶ学生」「アクティブ・ラーナー」についてのイメージを共有する時間が設けられた。その後、学生の主体的な学びに関することで、これまでメンバー各自がそれぞれの立場で経験したことや現在課題だと感じていることを伝え合った。引き続き、現在使えるインフラや仕組みはどのようなものがあるのか、それを活用したことはあるか、活用を阻害している要因はあるか、などについての意見が出され、それらが記録係によってホワイトボードに示された。その内容を見ながら、さらに発展的かつ活発な話し合いが行われた。

各グループで出される意見やディスカッションの雰囲気はそれぞれ異なっていたが、最初は緊張気味であったグループが、一部のメンバーの積極的な発言に触発される形で徐々に発言者が増え、グループ全体が活性化していくのが印象的であった。その影響もあって、グループ討議は、予定されていた６０分を超過することとなった。
ホワイトボードには、様々な意見やアイデアなどが示された。







例えば、学習交流プラザについては、「積極的に使われている」「予約が要るので使いにくい」「集まって話をするには飲食も必要」など、図書館ラーニングコモンズについては、「できて間もないので周知が必要」「教員への設備の紹介が足りていない」など、主体的な学びについては、「教員側から学生グループに足を運ぶ」「自主的に勉強会を開く」「先輩が後輩に教える」「教員がグループ学習をさせるような仕組みを授業に取り入れる」などが挙げられた。

その後、各グループで出された内容を全体で共有する時間が設けられた。その中で、学生代表者による振り返りが行われ、今回のような時間を持つことそのものが、学生の主体的な学びを加速させる最初のきっかけになるのではないかとの感想が述べられた。
最後に、学生部長の内山修一氏より閉会の挨拶が述べられ、ワークショップは開放的な余韻を残して盛会のうちに終了となった。

（文責：臨床心理学研究科　大石英史）

2018.12.7

学生・教職員ワークショップ事後アンケート

本日は、ワークショップへのご参加ありがとうございました。FD委員会では皆様のご意見を参考に活動を改善し、新たな企画を計画いたします。皆様の率直なご意見をお聞かせください。
（選択の部分は、番号を◯で囲んでください。）

1. ① 学 生　② 教 員　③ 職 員

2. 本日のワークショップは、何で知りましたか。
①メールでの案内　②学内ポスター　③友達から聞いて　④先生から聞いて
⑤その他（　　）

3. 本日のワークショップは有意義でしたか。
⑤非常にそう思う　④少しそう思う　③どちらでもない　②あまり思わない　①全く思わない

4. あなたは、積極的に参加しましたか。
⑤非常にそう思う　④少しそう思う　③どちらでもない　②あまり思わない　①全く思わない

5. このワークショップに参加して、何が得られましたか。

（　　）

6. ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

（　　）

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

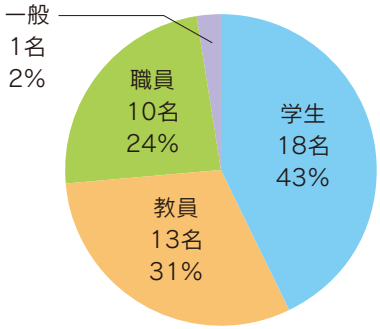
平成30年度 学生・教職員ワークショップ「学生の主体的な学びを加速させる」

事後アンケート（まとめ）

①ワークショップ参加者

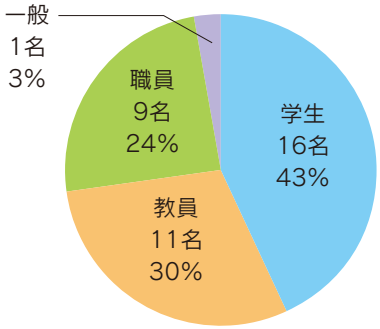
事後アンケート（まとめ）

学　生	18名
教　員	13名
職　員	10名
一　般	1名
合　計	43名



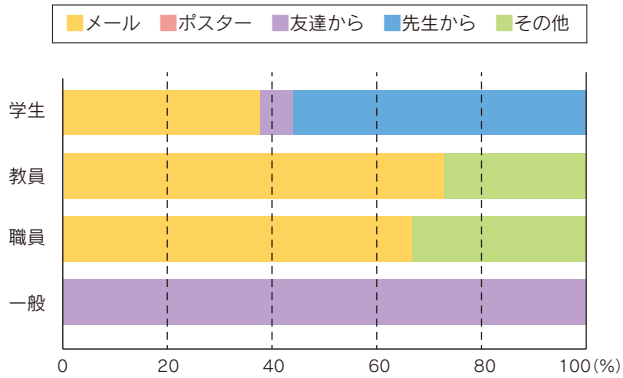
アンケート回答者

学　生	16名
教　員	11名
職　員	9名
一　般	1名
合　計	37名



②本日のワークショップは、何で知りましたか。

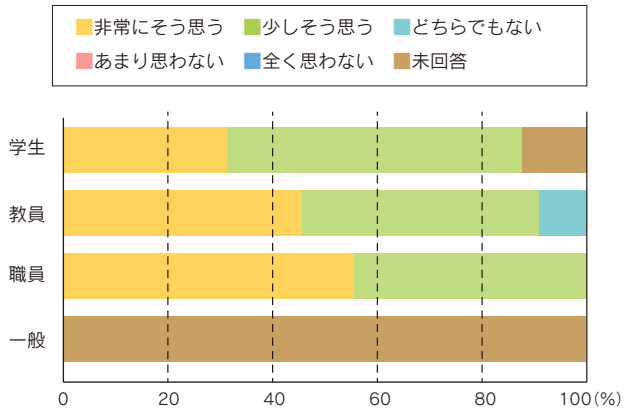
	学生	教員	職員	一般	全体
メールでの案内	6	8	6	0	20
学内ポスター	0	0	0	0	0
友達から聞いて	1	0	0	1	2
先生から聞いて	9	0	0	0	9
その他（※）	0	3	3	0	6
計	16	11	9	1	37



（※）その他：ホームページを閲覧して（1名）、FD委員として（3名）、未回答（1名）

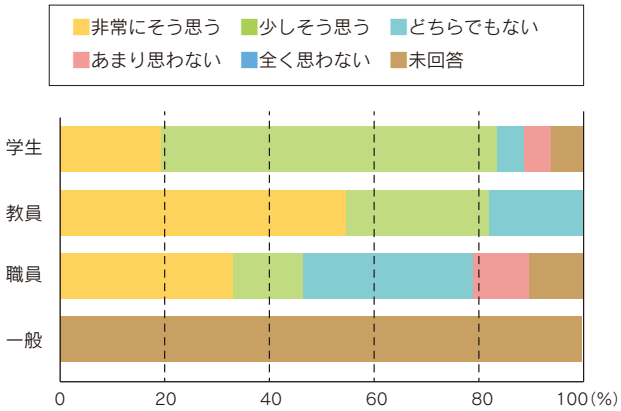
③本日のワークショップは有意義でしたか。

	学生	教員	職員	一般	全体
非常にそう思う	5	5	5	0	15
少しそう思う	9	5	4	0	18
どちらでもない	0	1	0	0	1
あまり思わない	0	0	0	0	0
全く思わない	0	0	0	0	0
未回答	2	0	0	1	3
計	16	11	9	1	37



④あなたは、積極的に参加しましたか。

	学生	教員	職員	一般	全体
非常にそう思う	3	6	3	0	12
少しそう思う	10	3	1	0	14
どちらでもない	1	2	3	0	6
あまり思わない	1	0	1	0	2
全く思わない	0	0	0	0	0
未回答	1	0	1	1	3
計	16	11	9	1	37



⑤このワークショップに参加して、何が得られましたか。(自由記述)

学生

- 学生と教員の認識に違いがあることがわかった。教員に思いを伝えられた。
- 学生・教職員が協働することの重要性を感じた。
- アクティブラーニングの概要を知れた。
- 大学が行なっている仕事に触れることができて、学生のために行なっている活動を知ることができた。
- 改めて主体的に学ぶとは何かについて考える良い機会になった。場や機会の活かし方をみつける、というのも学生のやることであり、そのヒントをくれるのが教員の仕事だと思った。
- 教員の方、職員の方と一つのテーマに対して話し合う機会はなかなか無いので、教員の方や職員の方が大学に対してどのようなイメージを持っているのかがわかり、とても有意義だと思った。
- こういう機会はなかなか無いので、何でもいいので相互に関われる機会を作るのがいいと思った。
- ディスカッションの取りまとめの機会ができた。
- 学生の立場から大学の学習に対して意見を言える機会がなかったので、本日はとても有意義な時間であったと思う。教員や職員の考えていることも知ることができて自分としてもよい刺激になったと思う。このワークショップで学生の自主的な学習には積極的な働きかけが必要であることがよく分かった。
- 学生として「学び方」を学ぶという言葉が印象に残った。受け身で学ぶだけでなく、主体性を持って学び方を学ぶことは、今後活かしたいと感じた。
- アクティブラーニングの重要性と課題。教員側から見た学生、大学。
- 主体的に学修するということについて考える機会になった。教員からの意見を聞くことができて講義に対する考えが少し変わった。今まで与えられたレポートを課題としてこなしていたのが、きっかけを与えるために与えられたものであると知った。
- アクティブラーニングの重要性や主体的な教育を促す重要性について理解でき、見識を深めることができた。
- 「学び方」について意識が変わった。施設をどのように活用するのか見直すきっかけになった。

教員

- 主体的に学ぶ学生たちを育む上で、教員としてどう関わっていくべきかいろいろ考えさせられた。
- 綿密に事前準備がされていて、各グループ討議も教員・学生・職員が各々の立場で「主体的な学びを加速させる」ためにどうしていくか熱心に議論をしていた。来週開催予定の学部FDシンポジウムに大いに参考になった。
- しっかりした学生が鹿大にはまだまだいることが分かった。
- 学生のニーズがどのようなものなのか。学生にとっては、質問するだけでもハードルの高いものだということを知ることができた。
- 講演では、今後の図書館のあり方、情報の伝え方等を具体的例を示されながら理解できた。後半のグループディスカッションでは、学生の意見が聞けたことが良かった。
- 学生の考えを聞く機会になった。
- 学生たちの中にいかに教員がからんでいくかがこれからの大学教育の課題だということを学んだ。授業やゼミに限らない交流が必要。そのための時間のゆとりも必要。

職員

- 学生や教員の意見を聞くことができて良かった。それぞれの立場で求めていること、考えていることの違いを知ることができた。
- 理想と現実のギャップ。
- 多様な立場の参加者と意見交換することができ、新たな視点を得ることができた。
- 国際教養大、九州工大の具体的な様子や取り組みを丁寧に解説くださり、大変よい勉強となった。特に国際教養大での外国語での教育実践の様子に刺激を受けた。このような機会のご提供に感謝申し上げます。
- 他大学の先進的な取り組みを聞くことができ、有意義だった。
- 主体的な学習を促すための仕組み作りを丁寧に行うことが大切だと思った。
- 他大学での取り組みを知ることができ、実際の先進的な取り組みをされている立場からの感覚を伺えてよかった。

⑥ワークショップに対するご意見等を自由にご記入ください。（自由記述）

学生

- 開催回数をもっと増やすとよいと思う。
- 学生以外の立場の意見を聞くことはあまりない機会であるため、自分にとっても貴重な経験になった。
- 「学んでいる」と思えるような「学び方」の修得が今後の課題として挙げられていたが、その重要性は理解しているものの、どうすればよいかという例をだしてほしかった。
- まとめて皆さんの前で発表するということのハードルが高い。話し合いで意見は言えるが、発表するとなると上手く伝えられない。
- 次回は、ラーニングコモンズでやってみるのはどうだろうか。
- 教員の方々とお話しできる機会があるのは良いと感じた。今回は「主体的な学び」がテーマであったが、他のテーマでもこのような機会があると「主体的な学び」のきっかけになるのではないかと思った。
- ワークショップ開催の周知の方法をもっと考えた方がよいと思う。

教員

- 実際のテーマがかなり具体的だったので、ワークショップのタイトルも具体的であった方が入りやすかったように感じた。
- 短い時間で成果を上げる方法としてとても優れていると思う。学生があと1～2名いてもよかったと思う。このようなテーマでとても有意義な学生の意見が聞けてとてもよかった。
- 日頃、話し合うことのない３者の立場が、幾つかのテーマを共有して話し合う場は、授業とは全く異なる意味があると感じた。
- 今後、ワークショップでラーニングコモンズを利用して欲しいと感じた。
- 過去から何度も実施されているが、この成果をどう活かすのか。

職員

- 職員の参加を押しすすめるのがよい。

今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、ご記入ください。（自由記述）

学生

- 学内の喫煙について（学内禁煙希望）
- 学生と教職員の交流の場について
- 学び方を学ぶにはどうすればよいか。
- 他学部・学年・教員とふれあう機会をどう増やしていくか。
- グループディスカッション以外

教員

- 学生の主体的な学びを実現させるために、教員・職員・学生がどう関わっていくのか。今後も可能であれば深めていくようなテーマを設定して欲しい。
- 学習設備の周知の仕方。
- 学生に対しての学習の動機づけ
- アクティブラーニングの実際的な方法について。

※自由記述欄は、一部、誤字脱字等を修正し、掲載しています。

鹿大版FDガイド第16号、第17号の発刊にあたって

～学修支援システムの活用とネット･セキュリティの啓発～

1.はじめに

本年度のFDガイドでは、本学で平成29年後期より学習支援システムmanabaを導入し、平成30年前期から学部レベルの教育で本格稼働させたこととあわせ、第16号でmanabaを活用した授業実践の報告を紹介するとととともに、ネットリテラシー教育に関する全教員の責任の増大という観点から、第17号でネットリスク回避のためのセキュリティ確保の諸対応を取り上げた。

2.第16号「manabaの活用法」

本号では、共通教育センターの大野裕史先生にお願いして、「manabaを活用した基礎学力向上と自発学習促進の試み」を、同センターの渡邊弘先生に「LMSについて何も知らない私がmanabaを使ってみた－「コースニュース」を使うだけでもメリット大」を寄稿していただいた。

大野先生は、大学教員の教育への負担が飛躍的に増大している中で、それを軽減し教育効果を向上させるためとして、授業支援ボックスの活用による基礎学力向上と、自発学習の促進のための反転授業へのmanabaの活用を取り上げ、大学教育は講義（教授）、演習（定着）、AL（思考･創造）がバランスよく配置されるべきで、manabaがそれを助けてくれる道具と紹介している。

渡邊先生は、manabaの個別科目ページのトップに出ている「コースニュース」の活用により、予習課題の提供や学生からの質問への回答を書き込むことに利用され、業務負担を軽減することや学生との情報共有が楽にできることを報告した。

3.第17号「知ってて、やってて、伝えてますか？～いまどきの教職員に必要な”リテラシー”としてのセキュリティ対応～」

本号では、本学にmanabaが導入されたことはもちろん、すでにネットワークが大学教育のインフラになっていることと踏まえ、学生ほかステイクホルダーに対してセキュリティ対応について教育や情報提供ができることが、いまどきの大学教員に求められるリテラシーであることに鑑み、学術情報基盤センターの佐藤豊彦特任教授の協力を得て、3つの対応について紹介した。

第１に危険なリンクやファイルを開いてしまった場合の対処は、まず「通報」であり、学術情報基盤センターのセキュリティ戦略室や部局責任者に、ネットワークから切断し、電源を切らずに通報することである。第２にパスワード作成の工夫で使い回しをやめることが重要であり、パスワードの個数が多くしても対処でき、長くても忘れないパスワードの作り方のティップスを紹介した。第３として、2020年1月14日でWindows７とWindowsServer2008R2の公式サポートが終了され、学内で使用禁止になることなどを踏まえ、大学が許可する仕様のPCや周辺機器を使っているかの確認を推奨する。

佐藤特任教授によれば、これらの対処がなされていることや、学生等に指導できていれば、万が一事故があった場合でもその教員や学生の責任はより小さいと考えることができるということであり、自らを護ることも意味するとのことであった。

平成30年度のWGメンバーは、米田憲市（法文学部、司法政策教育研究センター長）、渡邊弘（共通教育センター）、木下英二（工学部）、帆保誠二（共同獣医学部）であった。

（文責：米田　憲市）

FDガイド第16号

FDガイド第17号

平成30年度 大学IRコンソーシアムアンケート

実施期間 2018年11月1日～12月14日
対 象 者 2018年度学部1年生および3年生
実施方法 manaba
回答者数 1年生1233名、3年生753名

1.実施目的

大学IRコンソーシアムアンケートとは、一般社団法人大学IRコンソーシアムが学生の学習習慣や学習成果を把握することを目的として設計した学生調査である。本学は同コンソーシアムに加盟した2012年以降、全学部の1年生および3年生を対象に毎年秋に実施し、学生の学習状況に関わるデータを収集している。そして、コンソーシアムに加盟する他大学のデータとの比較を通して、本学学生の学びの実態を分析し、全学的な教育改善につなげている。

2018年度は、これまで活用してきた紙アンケートを廃止し、一部の学生を対象とした標本調査からmanabaを活用したWebアンケートによる全数調査へと移行した年であった。

2.実施概要

数年来、新任教員FD研修会ではアクティブ・ラーニングをテーマとして取り上げてきた。今年度も基本的にその流れの中にある。ただし、授業の具体的な運営方法としての技術だけでなく、そもそもアクティブ・ラーニングが求められる背景にある考え方に遡り、単位の実質化という観点から教育活動の設計を考えることとした。

(1)調査対象者

2018年度学部1年生及び3年生全員

(2)調査の実施方法

1年生については共通教育必修科目である初年次セミナーⅡの授業時間、3年生については各学部の講義や演習の時間に、manabaを活用したWebアンケートを実施した。

(3)調査項目及び回答所要時間

主な調査項目は次の通りである。回答所要時間は、1年生及び3年生いずれも約15分であった。

対象者	1年生	3年生
調査項目	● 学籍番号、プロフィール ● 授業経験 ● 学習行動、受講態度 ● 正課内外の活動時間 ● 知識、能力の獲得状況 ● 英語運用能力のレベル ● 大学生活、大学教育に対する満足感 ● 将来イメージ ● 高校時代の学習経験	● 学籍番号、プロフィール ● 授業経験 ● 学習行動、受講態度 ● 正課内外の活動時間 ● 知識、能力の獲得状況 ● 英語運用能力のレベル ● 大学生活、大学教育に対する満足感 ● 将来イメージ ● 在学中に経験したいこと
回答所要時間	約15分	約15分

3.回答率

1年生のアンケート回答率は60.8%、3年生のアンケート回答率は35.2%であった。学部別の回答率は次の通りである。

	1年生			3年生		
	学生数	回答数	回答率	学生数	回答数	回答率
法文学部	423	303	71.6%	417	41	9.8%
教育学部	221	132	59.7%	294	120	40.8%
理学部	192	133	69.3%	230	99	43.0%
医学部医学科	114	50	43.9%	113	8	7.1%
医学部保健学科	120	66	55.0%	126	43	34.1%
歯学部	57	35	61.4%	53	38	71.7%
工学部	508	302	59.4%	506	304	60.1%
農学部	215	128	59.5%	214	56	26.2%
水産学部	145	63	43.4%	158	15	9.5%
共同獣医学部	33	21	63.6%	30	29	96.7%
合計	2028	1233	60.8%	2141	753	35.2%

4.回答率

本アンケートの回答結果については、平成31年4月の全学FD委員会にて本学の回答データのみ報告が行われた。大学IRコンソーシアム全会員校の回答結果については毎年秋頃に公開されており、本年度についても他大学の回答データが公開され次第、他大学との比較に基づく本学学生の特徴分析が進められ、同委員会にて改めて報告が行われる予定である。

（文責：高等教育研究開発センター　中里 陽子）

鹿児島大学ベストティーチャー賞

鹿児島大学ベストティーチャー賞は、全学FD委員会において平成29年度からその制定が検討され、平成30年度末に第１回目の表彰が行われた。この賞は、本学教員の教育や授業に対する意欲向上と、総体としての大学教育の活性化を図ることを目的として、教育実践において顕著な成果をあげた教員の功績を表彰するものである。これまで、学部や学科単位で同様の表彰を行う例はあったが、大学としてベストティーチャー賞の授与を行うのは今年度が初めてとなった。

ベストティーチャーは本学の９つの学部と共通教育センターから毎年１人ずつ、計10名が選出される。さらに、学長や教育担当理事などで構成される選考委員会においてこの９名から３名の「ベストティーチャー最優秀賞」が選ばれる（残り７名には「ベストティーチャー賞」が贈られる）。

今年度のベストティーチャー最優秀賞受賞者及びベストティーチャー賞受賞者は以下のとおりである（敬称略）。

ベストティーチャー最優秀賞	
髙谷 哲也	教育学部
林 敬人	医学部
鄭 芝淑	共通教育センター
ベストティーチャー賞	
南 由介	法文学部
吉田 拓真	理学部
金子 芳郎	工学部
後藤 哲哉	歯学部
下桐 猛	農学部
小松 正治	水産学部
中馬 猛久	共同獣医学部

なお、今回のベストティーチャー最優秀賞受賞者選考に当たっては、特に「学生を意欲的・能動的に学ばせる取り組み」が重視されたことが選考委員会報告において言及されている。本学に限らず、昨今の我が国の大学においては学士の質保証は非常に大きな課題であり、学生の学習に対する意欲を喚起し、授業時間外の学習を促すことが各教員には強く求められている。このような背景に基づき、選考が行われたといえる。

（文責：高等教育研究開発センター　出口 英樹）

Ⅲ

鹿児島大学のFD活動

第2部

各学部・研究科のFD活動報告